



# 岐阜大学機関リポジトリ

## Gifu University Institutional Repository

Title	いきものがかりの言語学7～時間表現
Author(s)	山田, 敏弘
Citation	[岐阜大学教育学部研究報告. 人文科学] vol.[67] no.[2] p.[11]-[20]
Issue Date	2019
Rights	
Version	岐阜大学教育学部国語教育
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12099/77992">http://hdl.handle.net/20.500.12099/77992</a>

この資料の著作権は、各資料の著者・学協会・出版社等に帰属します。

# いきものがかりの言語学 7～時間表現

Linguistic Analysis of Ikimonogakari's songs 7 : their temporal and aspectual expressions

山田 敏弘

YAMADA Toshihiro

lingua@gifu-u.ac.jp

## 1. はじめに

今回も、神奈川県出身で、2018年11月3日に、1年10ヶ月に及ぶ「放牧期間」を経て「集牧」された3人グループいきものがかりの楽曲を取り上げて文法的分析を試みる。毎年、夏期刊行号に、このような内容を書いてきたが、およそ2年ぶりの新曲発表もあり考察をおこなった。

これから4回は、文末の文法カテゴリーにまつわる表現に着目する。その1回目は、時間の表し方を取り上げて分析をおこなう。

時間表現は、通常、現在など基準時からの出来事の捉え方であるテンスと、出来事のどの局面を取り上げて描くかを表すアスペクトに大別される。日本語におけるテンスは、状態性述語であれば「～タ」の形（以下、「タ形」）で表される過去と、それ以外（以下、「ル形」）で表される現在とが対立する一方、動作・変化を表す述語ではタ形が過去・完了のいずれかに解釈される場合もあるが截然と分かたれない場合もあり、ル形は、原則、未来を表す。一方、アスペクト形式については、タ形が完了を表すことがあるほか、出自として接続助詞＋補助動詞からなる「～テイル」や「～テアル」など、一次アスペクト形式のほか、動詞の語彙の意味を残す「～ツズケル」「～オエル/オワル」など二次アスペクトの形式まで、多岐にわたる形式も表現を補完する。

本考察では、まず第2節で、「明るい前向きの歌が多い」と評されることの多いいきものがかりが、どのようなテンス表現を用いて歌詞を紡いでいるかを見る。続いて、第3節においては、出来事のどのような局面を捉えて歌っているか、アスペクトの表現に着目して分析を試みる。

## 2. いきものがかりが歌う過去と未来

ひとつの楽曲の中に歌われる時間表現を分析すること上で、確認しておかなければならないことがいくつかある。

まず、基本的に主節のテンスを対象にすることである。まずは、過去の出来事と現在・未来の出来事をどのような割合で歌っているのかを考えるためである。

(1) いつか悲しみが闇を連れ 世界を閉ざしてしまったとしても

僕は歌うよ いつもの この場所 この空 君が帰るまで (水野良樹作詞「会いに行くよ」)

(2) いったって有り触れた奇跡を見逃すこともあるけど (山下穂尊作詞「明日ハレルカナ」)

(1)の「しまったとしても」の「～タ」は、条件表現であり、(2)は、学校文法で言うところの存続の用法である。いずれも、出来事を過去に位置づけるものではなく、本考察の対象としない。

次に、過去の出来事でありながら、タ形が用いられない場合である。

(3) 「変わらない」と信じてた その世界はある日変わっていて

- 判然としないこの「今」に躊躇い戸惑いもする (山下作詞「愛言葉」)  
 (4) 親友と呼べるほど 肩を並べ歩いたけど  
 「好きなひとができたんだ」と 嬉しそうに言うの (水野作詞「なんで」)

(3)は、述部の「躊躇い戸惑いもする」対象が直前の二格で示されることで、その前の「～テイテ」が理由とならないことから、「変わっていて」が実質的な主文末となっていると解釈できる。また、(4)は、過去の「肩を並べ歩いた」出来事時に「嬉しそうに言う」も生じている。つまり、過去の出来事が非過去形によって表されている。本来はこれらも本節の考察の対象となるべきだが、今回は紙幅の都合で分析対象とはしない。

以下、本節では主節のタ形を中心に分析する。引用する歌詞のうち、該当する「～タ」には下線を付す。主節以外の「～タ」には付さない。

## 2.1 過去を歌う歌

いきものがかりの楽曲の内、主節が過去で表される文を一定数以上連続して含む楽曲は、以下の通りである。

- (5) 「嬉しい」 「悲しい」 いくつの顔を見せたんだろう  
 素直になれたよ いつも 一緒だったね (水野作詞「おやすみ」)  
 (6) なんでなんで あなたになんで 恋しちゃったんだらう  
 ほんとはわかっているよ 笑顔が好きだった  
 また笑って会えるかな 明るく手を振れるかな  
 わたしのなかの あなたにキスした ねえ (水野作詞「なんで」)  
 (7) 冬の訪れを告げたのは切なさに染まった涼風  
 うっすらと消えていく影ぼうし 傍にいてと願ったのにな  
 あの日触れたあなたの手 もっと強く握り返して欲しかったなあ (山下作詞「かげぼうし」)  
 (8) あの日届いた恋の魔法は あなたの中できっと消えたの  
 出逢ったあの頃の夢を探す 意味の無いことだって分かつている  
 もう少しだけそばにいたいと あのとき何故そう言えなかつたらう…  
 遮るようにも聞こえた四文字 言わないでと願ったのに… (山下作詞「ソプラノ」)

過去を歌うということは、どういうことか。もちろん、日常生活では、「息子は、昨日、サッカーの試合を見た。」などと、単に過去を客観的に描写することもあるが、歌詞の世界で用いられるタ形は、懐旧であり「戻れない日々」への憧憬となる。このような主観的捉え方は、歌詞が作詞者の世界を聞き手に伝達することによって生じる感情であり、さまざまな終助詞等によっても強化される。(8)の終助詞的な「～のに」などは、実現しなかった過去に対する悔恨ともなる。

いきものがかりの楽曲にも、このような過去を歌った歌は、もちろんある。しかし、第一に、その比率が小さい。2017年の「放牧宣言」前にメジャーレーベルから発表された120曲のうち、1番の歌詞にも2番の歌詞にも複数の「～タ」が用いられる過去を淡々と歌った歌と言えるのは、上に挙げた4曲をはじめ、多くとも1割に満たない。

実は、この「過去を淡々と歌った歌」の認定は難しい。すべての文末がタ形である歌は、今のところ、見当たらない。主文末における「～タ」の割合がもっとも高いと思われるグレープの「無縁坂」(さだまさし作詞)でも、「～タ」で終わる文は、「ため息をついた」、「やわらかかった」、「小さくなった」、「小さくなった」の4文であり、「流してきたんだろう」や「あったはずなのに」のように、過

去の出来事に対する現在の判断を付加したものが2文である。その他に体言止め2文を含む4文が非過去であるから、ちょうど6割の文が過去を表現している。しかし、大きく異なる点は、非過去の文の性質である。「無縁坂」における非過去はすべて、現在を示しており未来を描いていない。このことが、典型的な「過去を淡々と歌った歌」であることを印象づける。

いきものがかりに、このような過去・非過去の用い方が見られる楽曲は少ない。過去を歌った印象の残る楽曲でも、たとえば、山下作詞「ソプラノ」は、夕形の文が「変えた」、「消えたの?」、「消えたの」、「言えなかったろう」、「願ったのに」と5文であり、非過去は、「濡らす」、「我に返る」、「鼓動は鳴る」、「無いの?」、「かばう」、「優しい」、「消えない」、「締め付ける」、「分かっている」、「耳をすめます」、「逢えるかな」、「しまおう(2回)」と12文に及ぶ。過去を描く文の割合は、3割程度であるが、一方、最後の2つのル形と意向形は未来の出来事を表す。この、最後に未来に向かう表現が用いられることが、重要なのである。

そんな中で、水野作詞の「なんで」は、異色である。「なんで」では、「心はずませた」、「歩いたけど」、「惹かれていた」、「よかった」、「握りたかった」、「ひとだった」、「よかったよ」、「好きだった」、「キスした」と、主文末が夕形の文は、いきものがかりの楽曲中でもっとも多く用いられている。さらに、過去の出来事でありながら非過去形で表されている(4)に示した「言う」もある上に、5回繰り返される「恋しちゃったんだらう」と、類義の「好きになったんだらう」という「～タ」(この場合完了用法)もある。繰り返しも1回とすれば、半数の文で過去を描く。「なんで」は、いきものがかりの楽曲中、もっとも過去を描く(未練を歌う)歌であり、その点で異色である。ただ、「なんで」のような過去が多く描かれる楽曲であっても、「胸がいたい(2回)」、「いるの(3回)」、「彼女なんだ」、「言えない」、「傷つくこともないのに」、「気づかない」、「いるのにね」、「消して」、「消えていく」、「無理をしているかな」、「泣けるな」、「分かっているよ」、「手を振れるかな」と、非過去の出来事も多く描かれており、未来を表す文も見られる。過去を歌ったとしても、最後には必ず未来を向く。これが、いきものがかりの楽曲の特徴である。

## 2.2 過去を現在と対比的に歌う歌

前節で、「主節が過去で表される文を一定数以上連続して含む楽曲」としたのは、次のような楽曲が、「過去を歌う歌」と認定するにふさわしくないからである。

- (9) 会いに会いに会いにいくよ 君もずっと歩いてきた  
誰かが愛して 君はそこにいる 精一杯を 歌に託して  
会いに会いに会いにいくよ 悲しみよ優しさになれ  
涙も笑顔もちよっとの希望も ずっとそばにあるよ (水野作詞「会いにいくよ」)
- (10) いつだって 最高の感情を描いてみた 僕らそうやって純粋に夢をみた  
果てしなく広がるこの空の下 僕らはその答えを見つけました  
大切な存在に気づいたんなら ヒトはいつだって空を羽ばたけんだよ  
伝えたい言葉達に託すんだよ 僕らの信じる道開くために  
(山下作詞「いつだってぼくらは」)
- (11) 夕暮れの街は 「寒いね」って言って  
つないだ手に赤くなる 私のことからかったよね  
あこがれた夢のこと 話した瞳は  
美しくて ずっと 見つめていたくて  
もっと好きになってた  
[サビ] いつだってあなたがいた あの頃を越えてゆこう

- 時間といま歩きたいから  
 遠ざかるあなたの影 風になって消える  
 泣かないよ 私の明日を輝かせるから (吉岡聖恵作詞「白いダイアリー」)
- (12) この道をならんで歩いた  
 傷ついたときもあったね  
 あなたもわたしも涙をぬぐった (水野作詞「あなた」)

水野作詞「会いに行くよ」において、主節に「～タ」が用いられているのは、(9)に示した「歩いてきた」のみである。この一文があるからといって、「会いに行くよ」が過去を歌った歌とすることはできない。なぜならば、全体が「会いに行くよ」という未実現の出来事に対する意志表示をテーマとしているからである。この「君もずっと歩いてきた」は、「会いに行く」相手である「君」の過去における属性を対比的に表示していると捉えることができる。そうでなければ、ここで過去を叙述する意味が得られない。

(11)の「白いダイアリー」は、たしかに過去を回想して描く文が多用される。1番の歌詞はほぼ過去の叙述である。それが、(11)に示したように、2番のサビから、急にタ形が「あの頃」の連体修飾節を最後に影を潜め、未来志向になる。この切り替えは、歌われている内容から考えて心の切り替えを表している。さらに、(12)の「あなた」も、「あなた」と歩んだ過去を描きつつ、その過去の出来事が、「あなたが笑うたびに嬉しくなれるんだよ」と今を、「ともに生きたい」と未来を志向する流れを組み立てる基点となっている。すなわち、過去は、未来を描くためにあるのが、いきもののがかりの楽曲の特徴なのである。

今、「いきもののがかりの楽曲の特徴」と書いたが、この手法は、RADWIMPSの「前前前世」や、back numberの「ハッピーエンド」でも使われている、物語としての歌詞ではよく採られる手段である。そして、新曲「太陽」においても、同様の手法で、過去を振り返り未来に進む決意を歌っている。この「太陽」では、さらに、完了のタ形も効果的に用いられている。

- (13) 小さな小さな出来事に 悩んでいたのは何故だろう  
 後から後から溢れてく 涙が頬を伝うよ  
 「夢」なんてことを大げさに 捉えすぎていたのかなあ  
 君にもらった言葉たち それだけ信じてた  
 久々に見た故郷ふるさとの空 あの頃の「夢」に ほらまた私包まれた  
 (いきもののがかり作詞「太陽」)

最後の「～タ」は、過去ではなく完了である。その効果は、過去の持続的事態を「～テイタ」で回顧しつつ過ごす「今」に生じた変化が、この先も続いていくことを著している。たった1音で、世界の変化を表現するのは、完了の「～タ」ならではの効果であり、そのことによって、このあとに続くサビの現在と未来への思いが対比される。

さて、本節最初において従属節のタ形を除外して考えるとしたが、過去と現在を対比する用法は、名詞修飾節のタ形でも表されているところがある。

- (14) 次のドアを開いて 走り出した君の 後ろ姿遠くなる  
 花火舞う夏祭り ふたり見た星空は すべてまぼろし (水野作詞「赤いかさ」)
- (15) この場所を分かち合えたこと いつの日か誇れるのでしょうか (山下作詞「甘い苦い時間」)

(14)の「赤いかさ」は、典型的な過去の恋愛を回想して歌う楽曲であるが、過去ばかりを描いている印象をさほど受けない。それは、名詞修飾節に過去を描いて背景化することで、前景となる主節の「今」を際立たせているからである。(15)も同様に、過去の出来事を「誇る」という動作の対象としている。この名詞修飾節に過去を描き主節の現在・未来と対比する技法も、いきものがかりの常套手段である。水野作詞の楽曲では「茜色の約束」など、山下作詞の楽曲では「明日へ向かう帰り道」などに、この技法が観察される。

(16) 泣いて笑ってつないだこの手は 重ねた言葉に負けない約束  
あなたに出逢えた茜の空に ほら あの日とおなじことを願うよ (水野作詞「茜色の約束」)

(17) いつか見たあの空に浮かんだ雲に似ているなあ  
ふわふわ流れ行くまま 明日へ向かう帰り道 (山下作詞「明日へ向かう帰り道」)

現在・未来は、過去と対比してこそ輝く。集牧後第1弾の配信曲「WE DO」(水野作詞)は、未来を歌った歌であるが(完了の「～タ」はあっても)過去は描かれない。挑戦的な楽曲ではあるがいきものがかりらしくないと感じられるのは、時制の広がりへのなさに理由がある。

## 2.3 まとめ

名詞修飾節のテンスについては、詳述するとページ数がどれだけあっても足りない。擬古文的な過去の助動詞「し」にはあえて触れず、過去の出来事を表すタ形を中心に考察した。

過去を描くこと自体が後ろ向きであるわけではない。悲しい過去もあれば、また楽しい過去もある。内容の問題である。いきものがかりも同様に、両方の過去を歌う。しかしながら、悲しい過去だけを歌う歌詞は極めて稀であり、悲しい過去こそが前向きに未来に向かう基点となっていることが多い。過去と現在・未来が、単文で並べられた文章に加え、名詞修飾節を利用した背景対比こそ、過去を描きながら未来を向かせる技法となる。彼らの楽曲が「ポジティブである」と評されるのは、このような内容と技法を併せ持つからと言ってよい。

## 3. いきものがかりが歌う出来事の局面

現在時を基準とした時間の前後がテンスであるのに対して、出来事自体の流れ方とその局面の描き方は、一般にアスペクトと呼ばれる表現が担う。日本語では、形式として過去と合流した「～タ」が完了を担い、消失した種々の完了の助動詞の機能を埋めるために、「～テアル」や「～テイル」のような結果残存の用法が補助動詞を伴って表され、さらに同様の補助動詞表現が進行を表すようにもなった。このようなアスペクト形式を観察することで、いきものかかりの楽曲に見られる出来事局面の捉え方を分析しようとするのが、本節である。

### 3.1 いきものがかりの歌詞に見られる「～テイル」の意味

「～テイル」には、進行、結果残存、反復などの用法がある。

(18) 夕焼け色に染まるる この街の中歩いている  
言葉にすればいつも伝わらなくて胸にしまう  
いつか見たあの空に浮かんだ雲に似ているなあ  
ふわふわ流れ行くまま 明日へ向かう帰り道 (山下作詞「明日へ向かう帰り道」)

(18)に示した2例の「～テイル」は、「歩いている」が動作の継続（進行）であり、「似ている」は、いわゆる金田一の第四種の動詞であり常に「～テイル」の形で用いられ状態を表す。ここで教科書のような概説を述べる紙幅もないが、水野作詞「ありがとう」の「あいしてる」のように、「～テイル」が他の形と置換されない場合を考察の対象にする必要はなく、置き換え可能な場合に、相互の意味的關係を考えることが重要である。

さて、(18)で気になるのは、擬古文調の「染まるる」もさることながら、「歩いている」が「歩く」とどう違うかである。もちろん、メロディに乗せるための拍数を考えて選択されたこともあろうが、その違いが度外視されるならば、次の場合と対比して考えることも重要である。

(19) 翼はあるのに 飛べずにいるんだ ひとりになるのが 恐くて つらくて  
優しいひだまりに 肩寄せる日々を 越えて 僕ら 孤独な夢へと歩く

(水野作詞「YELL」)

もちろん、概説書通りであれば、「歩いている」は現在の状態であり、「歩く」は未実現の現象と捉えることができるだろう。しかし、拍数を考えなければ、(18)の「歩いている」は「歩く」でも言えなくはない。「歩く」のような裸のル形は、反復や性質、意志などの意味をもつことがあり、事実、(19)の「歩く」は、「僕ら」という意志を持った主語があることから、主語の意志を表したものと考えられる。

一方、(18)の「歩いている」は、第三者が主語であれば、客観的な観察として理解されやすいが、この「歩いている」の主語は、「僕」である。そのため、自らの動作の継続を、他の誰かに報告する意味をもつ。あるいは、遠く中空から自らの姿を発見し、クローズアップする効果もある。「歩く」に、これらの効果はなく、場面描写がなされるのみである。(18)は、夕焼け色の中に「歩く」という動作を継続する自分を見いだすという、あたかも芥川龍之介の『羅生門』のような効果が見られる出だしなのである。実際、山下作詞「明日ハレルカナ」の「街はまだ夕日に包まれている」や、水野作詞「笑顔」の「花がまた咲いている」などは、自らの視点から捉えた外界の状態を表すものであり、主人公の動作の舞台背景を叙述する。これは、静的な背景描写の「～テイル」である。(18)のように自らが主語になった場合でも、背景から主人公にズームインしていく様子を感じられるのは、この「～テイル」による客観的観察と主語が一人称であるということのずれから生じるものである。

上記は動作動詞の場合であるが、一人称主語とともに用いられた思考・感情の動詞の場合には、「～テイル」が別の印象を与える。

(20) 腹式呼吸でささやいた 色とりどりの Love Message

心配しないであたしは あなたのことばを信じている (山下作詞「message」)

(21) 離れても いつの日か 出逢えると 信じている (水野作詞「HANABI」)

(22) あの日届いた恋の魔法は あなたの中できつと消えたの

出逢ったあの頃の夢を探す 意味の無いことだって分かっている (山下作詞「ソプラノ」)

(20)や(21)の「信じている」は、うがった見方をすれば、時間的線分の中に置かれた表現である。それは、「信じている、今はね」と、時間的限定を付けられることから確かめられる。「信じる、今はね」としても、「信じている」期間の限定はなされず、より強い意志を感じる。もちろん、(20)のような陽気な歌に、そのような限定は似つかわしくないが、歌っているのは、あくまで現況なのである。

一方、(22)はどうか。「分かる」は、分からない状態から分かった状態への変化を表す。学習者に「分かるか」と問えば理解可能かどうかを問うており、「分かっているか」と問えば念押しに聞こえること

からも、(22)の「分かっている」は、理解していることが当然であるとのニュアンスを伝える。同じ思考・感情の動詞の動詞であっても、その「～テイル」形の意味は同じではない。その意味の差分も歌詞に織り込まれているはずである。

さて、歌詞においてもっとも有効に働く「～テイル」は、過去における気づきである。

- (23) 一体いつからなんだろう？ 僕ら大人になって、  
見えなくなってたいくつもの夢や希望が在ります。 (山下作詞「あしたのそら」)
- (24) 春に吹き込んだ 東京の風に何かをみつけ  
歩き出すだと きみは 泣いていた (水野作詞「ふたり」)

(23)は、「大人になった」ことには気づかず、ふとしたときに、すでに「なっていた」ことを知った場面である。「見えなくなって (い) た」も同様である。(24)も、「何かをみつけ、～泣いた」わけではなく、私が「きみ」を見たら「泣いていた」というように、観察した時点での話者の観察内容が描写されている。無意識がふとしたきっかけで意識化されること、それは、劇的とまではいかないまでも驚きという新鮮さを聞き手に与える効果がある。

実際の使用された歌詞を見ると、水野作詞の「赤いかさ」の「いつからか僕ら 別々の時を 生きていくなってことに慣れていた」、「ありがとう」の「あなたの夢がいつからか “ふたりの夢”に変わっていた」など、数曲に見られるが、実は、いきものがかりの楽曲に、この気づきの技法は多用されない。過去における気づきは、好都合なことよりも不都合な出来事に対して使われることが多い。もちろん、「ありがとう」のように、好都合なことに使うこともできる、内容次第のところもあるが、不都合なことにふと気づくことで現在からその出来事を後悔する場面が多いのも事実である。いきものがかりの楽曲でこの技法が少数しか見られないのは、彼らが志向する歌詞の内容と合致しないためであろう。

「～テイル」に関しては、単純な結果残存状態や繰り返しを表す用例も多数用いられるが、あえて彼らの楽曲を特徴付けるものとはなっていないため、ここでは省略する。また、「～テイル」の否定形として用いられる「～テ(イ)ナイ」も、山下作詞「いろはにほへと」の「あ~切ないわなんていつも口に出してないで」、同「最後の放課後」の「何を言葉にすればいいのかもまだわかってないけど」および「君が気付いていないこと あたし分かってもいたけど」、吉岡作詞の「僕はここにいる」の「忘れてないでしょう?」、水野作詞「1 2 3～恋が始まる」の「優しすぎる キミは たぶん 気づいてない」の5カ所に認められるが、いずれも上記見た「～テイル」の分析のうちに含まれるものと考えられる。

### 3.2 いきものがかりの歌詞に見られる「～テイク」「～テクル」の意味

アスペクト形式で、「～テイル」と同程度用いられているのが、「～テイク」である。

「～テイク」は、ある基準時よりも後の時間に、時間的に一定期間を有する変化・動作が継続・進展することを表す形式である。

- (25) 歩いていく 歩いていく 僕の「今」を生きていこう  
君がくれた言葉はここにあるよ そうだよ 歩いていこう (水野作詞「歩いていこう」)
- (26) どこでつまずいたって構わないけど 出来る全ての事を探していくんだよ  
(山下作詞「今走り出せば」)

現在時を基準に取れば、その基準時よりも後の時間は未来となる。そのため、(25)の「歩いていく」



のような終止形は、未来に向けた意志の表明となり、「歩いていこう」と意向形となればより明示的な意思表示となる。一方、(26)の「探していくんだよ」も、その「つまづいた」時点よりも後に「探す」という動作を継続的にこなうことを示している。この形式のもつ、未来かつ継続的という2つの特徴が、いきもののがかりの楽曲の前向きさを引き立てる。

無意志動詞とともに用いられた例も見ておく。

(27) きらきら光る思い出は 満天の星に変わっていく

さよならなんて恐くない 空にうたえば 泣かないよ (水野作詞「おやすみ」)

(28) うっすらと消えていく影ぼうし 傍にいてと願ったのにな (山下作詞「かげぼうし」)

これらは、変化の漸次性を示す。背景描写において時間の移ろいを示すことは、時間の流れ方、あるいは、その捉え方がゆるやかであることを示す。(27)で見上げる夜空も(28)で見下ろす路面も、徐々に変化していくことが表される。その主体変化そのものではなく、時間経過が描かれるのである。

いきもののがかりの楽曲中には、この「意志動詞+テイク」や「無意志動詞+テイク」が頻用される。このことは、前者は意思表示であり後者は漸次的変化である以上、同じ機能として捉えることはできないが、パースペクティブは未来(基準時以降)に広がっていく。表される内容次第だが、未来志向の楽曲に合う形式である。

一方、基準時より前から生じた同様の変化・動作の継続・進展を表す「~テクル」と対になるが、いきもののがかりの歌詞に「~テクル」は、水野作詞「SAKURA」の「君の声がこの胸に聞こえてくるよ」と、山下作詞「How to make it」の「聞こえてくるものは何もない」のような、物理的な移動を表す用法を除けば、使用はわずか3例である。

(29) ダメな自分が悔しいほど わかってしまうから損だ

強くはなりきれないから ただ目をつぶって耐えてた

ほら 見えてくるよ (水野作詞「帰りたくなかったよ」)

(30) コイスルことが 素直にわかってくる

くやしくなるくらいに 好きだから (水野作詞「コイスルオトメ」)

(31) そっと息を止めた ふたり 手 握った

わかっているんだ もうすぐ きっと 奇跡が やってくる (水野作詞「流星ミラクル」)

(31)は、「やる」が実質的な意味を持たず「やっていく」とも対応しないことから、これを除けば、「~テクル」は2例しか用いられていない。いずれも、視点への継続的・漸次的接近を援用して、徐々に知覚されることを示している。ただ、知覚の漸次的成立を表す用法を除けば、「~テクル」は世界を狭める表現となる。待ち遠しいものか否かという語彙的内容が重要であり、文法装置として積極的な機能を持たない。そのことが、あえて使用する理由をなくしているのであろう。

いきもののがかりは、未来志向の楽曲という特徴から、「~テイク」を多用し「~テクル」は限定的に用いるという特徴を有している。

### 3.3 その他のアスペクト形式

意志的な動作結果の残存を表す「~テアル」、および、結果を意図的に残すことを表す「~テオク」は、下記用例のみ観察された。

(32) 君と歩いた あの帰り道 今はもうここにはないけど

- ゆれていた 思い出は 今もしまってあるから (山下作詞「赤いかさ」)
- (33) “迷い”や“不安”でさえ僕らの“いちぶ”なんだよ  
ひとつ ひとつの涙を ちゃんと覚えておこう (水野作詞「なくもんか」)
- (34) この鍵は渡しておこう すべてはその手で決めていくんだ (水野作詞「青春のとびら」)

「～テアル」と「～テオク」は、「準備」を感じさせる。(32)も「思い出」が単純に残っているのではなく、意図して保存しその結果が残っていることを示しているし、(33)と(34)は、未来の何かの事態に備える決意を表している。特に「～テオク」は、いきものがかりの未来志向にふさわしい表現とも言える。

補助動詞ではなく複合動詞後項として時間を表す表現も散見される。

- (35) 変わりはじめた僕は また歩き出す (山下作詞「赤いかさ」)
- (36) 悲しみ”はまだ覚えられず “切なさ”は今つかみはじめた (水野作詞「ブルーバード」)

「～ハジメル」は多い。他にも、水野作詞「歩いていこう」の「雪が降り始めた」、山下作詞「オリオン」の「瞬き始めた夜空を見つめて」、吉岡作詞「白いダイアリー」の「時間といま歩き始めたいから」などがある。反面、終了を表すのは、山下作詞「夏色惑星」の「乾ききった答えなら」の「～キル」ぐらいであり、「～オワル／～オエル」は見られない。アスペクトの問題でありながらも語彙的な問題であるが、開始時を多く歌うことは、前向きであると多くの人捉えらるであろう。

持続を表す形式としては「～ツズケル(／～ツズク)」がある。

- (37) SHALALA 僕はずっと 唄いつづけていくよ (水野作詞「ホタルノヒカリ」)
- (38) ちゃんと抱きしめるよ ちゃんと愛しつづける (水野作詞「あなた」)
- (39) 遠のく昨日も近づき続ける明日も  
変わらずいつまでも ずっと抱き続けてたいな (山下作詞「甘い苦い時間」)

ほかにも、水野作詞「青春ライン」の「確かに追いつけていく」など、複合動詞の「～ツズケル／ツズク」だけでも非過去で未来に続く表現が20曲は越える(動詞の「続く」も合わせれば倍増する)。120曲のうちであるから、この継続を表す「～ツズケル／ツズク」こそ、もっとも、いきものがかりのポジティブさを表す最大の文法装置となっていると言えるだろう。

アスペクトの形式として忘れていけないのは、完了の「～タ」である。

- (40) 伝えたくなったよ 変わらない夢を  
聞いて欲しい話があるよ うなずいてくれたら嬉しいな  
(水野作詞「帰りたくなったよ」)

「伝えたくなった」結果として、現在を歌う。これは、完了の用法である。単に完了の用法の使用を指摘しても、彼らの楽曲の特徴を言い表したことはない。問題は、新たな場面設定の後の新たな局面を描く表現が続くことである。(40)であれば、「伝えたくなった」からこそ、「聞いて欲しい」わけであり、共有したいのである。

物語には展開が必要である。他のアスペクト形式と異なり、完了の「～タ」は、次の場面への切り替えを表す表現となる。

#### 4. おわりに

いきものがかりの楽曲に見られるテンス・アスペクト表現を見てきた。結果、彼らの楽曲には過去を淡々と描く表現が少ないこと、もし過去を用いるとすればそれは未来との対比において用いられること、持続を表すには、動作進行の「～テイル」よりも「～ツズケル」が好んで用いられること、などを指摘した。彼らの楽曲は、よく「前向きである」などと評価されるが、それは、語彙的選択だけでなく、文法的装置によっても表現されているということである。

彼らの楽曲に見られる時間感覚は、他のアーティストと比較しても特徴あるものである。

(41) いつかの過去にだって「現在」があったって

もっと言うなればそれも また過去の「未来」 (山下作詞「甘い苦い時間」)

(39)に示した歌詞と合わせて(41)を見ると、時間的展望(パースペクティブ)という俯瞰した捉え方と、時間軸の一時点に視点を置いた刹那的な出来事把握がよく理解される。このような時間的把握をしている小中学校の物語文教材は、管見のため多くを知らない。もちろん、小学校2年生の「お手紙」や「ふきのとう」にも、文末の「～タ」と「～テイル・テイタ」の使用による時間の流れを感じさせる文末表現が見られる。しかし、高学年になるほど、ワクワクする時間の流れを感じさせる作品は、宮沢賢治「やまなし」など少数作品を除けば多く見られない。時間軸を行き交い、それぞれの時点で様々な方向を見据える、タイムワープをしているような工夫された仕掛けが、いきものがかりの楽曲にはちりばめられている。この感覚の学習は、ぜひ国語教育でも取り入れたいものである。

#### 【参考文献】

- いきものがかり(2013)『いきものがかり全歌詞集』シンコーミュージック・エンタテイメント  
日本語記述文法研究会編(2007)『現代日本語文法3 アスペクト・テンス・肯否』くろしお出版  
(平成31年1月7日受理)